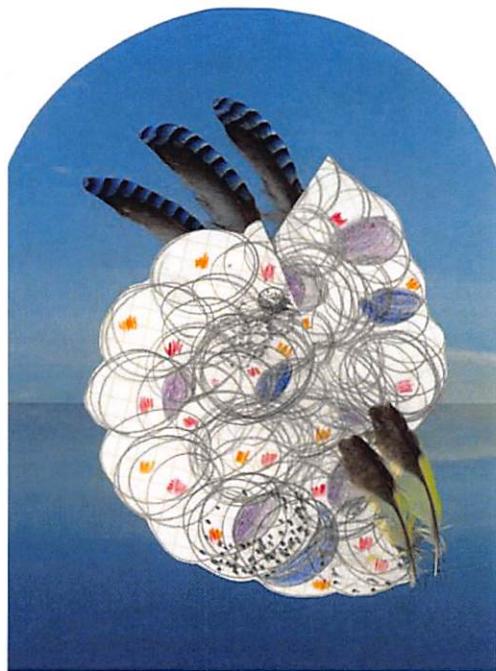


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2021.10



令和3年10月1日発行(毎月1回1日発行)第69巻第10号 No.761

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上つてきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものと同化して大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地 中 海

一〇二一年 一〇月号 (通巻七六一號)

◇今月の二十首詠……家族

庄司菊枝 2

■作品[A]

磯田ひさ子・市原やよひ他 4

A

C

B

A

若松喜子他 20
渡辺英子他 48

江尻リエ子他 59

鷹野長子他 72

■オリーブ集

高原 桐・谷川節子他 38

大江晴美・町田龍子 16

A……小野雅子・藤澤元子

岩井久美子・村上 旭

B……神田鈴子・許田邦子

C……石田明彦

オリーブ集……福光敬子

久我田鶴子

◇今月の二人

香川哲三

小橋美沙世

今日の二人・作品評

香川進の生きものの歌 36

田土成彦 15

最近の歌誌より

私と短歌との出会い (230)

クリップ……88

小原香里 表3
神田通信……表3

■遊覧寄港

〈私を支える三つの言葉〉 吉野ふじ子 46

◇シルクロード・カフェ——【責任編集】木村文子

44

■歌壇月旦

玉井綾子 47

■八月号作品批評

64

家族

庄司 菊枝

昭和七年生まれ。
昭和四十年「地中海」入社。
諸支社所属。

定年の夫とのくる日日あたらしく豆煮ゆる間を囲碁にかたむく

終盤の地響く花火にしつかりと吾がふところに犬を抱きしむ

納め日の祭り太鼓に子らの声ちかづくほどに婆も外に立つ

台風に倒れし櫻の太きなど片付く孫子の声に聴きに入る

テレビ電話に集う家族ら十八名われの米寿の宴席うまる

たどり来し君津の真昼を散る紅葉しばしの風にわれも染まりぬ

転倒の瞬時悔しく土叩くその右腕の見るみる腫れる

うつすらと夕茜ひく巻雲の入江に映えし岬へのびる

房州のはつ春を見よ満開の菜花畑にむすめら笑まう

今朝とれし寒の鱗をさく指にぶちつとはじける生をいただく
われを乗せ嫁ぎし街の記念日にS Lいまし汽笛を鳴らす

花見とて母の馳走の重箱に里思い出す小金井の桜

永らえて今年も出逢うさくら花にがき思いも遠く消えゆく

午前四時明るみかけし山の端に山吹色の月を見送る

母の日に鉢植え届くカーネーション八十八本色を寄せ合はう

大空をわたる白雲あたらしく告示待つ娘の朝風すがし

四度目の市議選に立つ娘と共にうぶすな神社の釣鐘たたく

住み古りし町の地図手に山里へ一票頼む日の暮れ早し

若みどりさゆらぐ窓に目覚めつつ娘の選挙戦終えし安らぎ
あじさいに銀の跡ひくカタツムリわれも明るく卒寿迎えん

作品 A

磯田ひさ子

やどかり

・森

鉄と鉄ぶつかる音を不器用に立てつつ電車が隅田川渡る
大川のかなたに湧ける峰雲の白の莊嚴まぎれなき夏
二階まで蔓を伸ばししあさがほの奮闘ひらく藍の三つ四つ
大小の手提げをベビーカーに下げ令和の母子やどかりに似て
紛れ込むたましひあらむうす青きネオンの走る天望回廊
スカイツリー見ゆれば心安らけし浅草に根を下ろしゆくらむ
十ヶ月ぶりにまみゆる筑波嶺に思はずやあと片手を高く

市原やよひ

オリンピック

・萬

聖火台の花開かせてトーチ持つ大坂なおみ今宵美し
あの時は秋の青空今聞くオリンピックは真夏の夜に
設計者の思いあふる競技場観客のなきオリンピックに
整然と並ばぬ入場行進は閉会式と紛う姿に
ドローンが作る地球が空に浮く光の粒を振り撒きながら
オリンピックの年に生まれし長男はああそうか五十七歳
ともかくもオリンピック始まりぬしばらくここに溺れていよう

梅本武義

散策

・羊

雷鳴に雨の激しき夜の明けて二階より見る背戸と裏山
雨後の日は小川に沿いて散策す水量増せば覗くが楽し
爪を上げ刃向かうもだめ藻屑蟹少年の日のこつを忘れず
散策に見遣る青田の日々に濃く今日は啄む白鷺隠す
早起きの得に貰いし花オクラ新鮮な黄を初めて食す
江戸幕府武士階級の思わる中華帝国共産党员
彈圧の香港ミャンマー コロナ禍を路上飲酒の日本の自由

大浪美雪

梅雨寒

・森

すき間なき葦原のなかを覗きたり姿を見せずギヨギヨシと鳴けるを
四十雀の声に合はせて青梅に竹串をさすシロップにせむ
空一面うすべに色に染まり始むしばし休まむ永き日の暮
花終へし藤は吊り下ぐ十余りの緑の莢実持ち重りする
八重咲きのどくだみ壺に花びらの三段重ねドレスの乙女
梅雨寒の糠床のなか温くしてかきませかきませ発酵発酵
一瞬の風に雨傘もち上がり 歳をとりたりメアリー・ボビンズ

奥田陽子

夏となる

・羊

菊地栄子

梅の実

・湾

ゆつたりと時間流るる美容室より屋根光る車つきにつにみゆ
短髪をグラデーションに染めゆきし若き笑顔の暫くのこる
街路樹の山桃の下ゆく親子夏雲湧きてはだえ光れる
声のみに尾長の群れと知りており枝わたりつついに近く
その姿とらえるまでに近づけどはや過ぎゆけりながき尾見せて
木の下に観察長き父と子の交わせる声のふと聞こえ来る
色の濃き芝生を踏めるみどり児の足にふれ来し風夏となる

小野雅子

朝顔

・羊

朝顔市に毎年ゆきし日もはるか大輪のはな押花に残る

朝顔の鉢提げる人むかう側のホームにも立つ地下鉄の駅

去年今年朝顔市は開かれずコロナが人の脳はひ止めて

二年生より種うけ継ぎて校庭に一年生が植うる朝顔

朝顔の観察日記葉に触れて「くすぐったい」と書かれてゐたり
芝刈りの機械に追はれ植木鉢のかげにとび来るみどりのバッタ
ストーリーのある夢を見ぬ山路を歩きてゐしが疲れて目覚む

神田鈴子

五輪開く

・大

中止、延期の声渦巻けど開かれしオリンピックにいかに向き合ふ
着々と競技の進む日すがらをテレビの前に胸熱くる

中国を相手に悲願の金メダル伊藤、水谷ひしと抱き合ふ

白血病克服したる池江璃花子泳ぎしあとの笑顔が眩し

無観客のままに競技は進みゆく大会場にひびかぬ声援

会場の溢るる熱氣にひるむなく急拡大するコロナウイルス
体操の世界のトップに常ありし内村航平舞台より去る

共存は出来ぬとすがりを追い払う追い払えども軒下に来つ
従順にワクチン接種の順番待てり諾いがたし晩年の世は
右折する十字路の道反転し燃えるばかりののうぜんかずら
嬉喜に終わるかも知れぬ花付けし柿の青き実すでに落ちいる
梅雨空の無風の公園白き穂の咲き終わりしがつきつに散る
降りくればモミの木立に隠れたる番の鳥も雨宿りする
実りゆく青き梅の実朝々を眺めて暮らす平穏の日々

北山雪男

残日抄

・伊

子の帰りを待ちし日ありき産院よりまた流離さがりの若き間より
核家族、爆弾家族 年旧りて爆けてほろり孫授かりぬ
心ひそかに俺に似るなど念じをりジジ2ババ2で嬰兒開み
爺様と呼ばれる筈がジイジとは、何や知らんが返事してゐる
ぬひぐるみを友とし和む孫である椅子取りゲームに椅子一つ足し
どのやうな過去を持ちしやまなじりに涙乾かせ眠る三歳
その母の血筋色濃く肌白く孫は道産子札幌育ち

木村文子

わっしょい

・羊

透明な空に向いて口笛をふく人ありぬ春呼ぶごとく
わっしょいと春の大地をさみどりの背でおしあげ落の轟咲く
ふきのとうに春が来たねと囁けばつららの滴がぼたりとたれて
ふきのとうの子を連れて帰ろうかけれどこの子は小さな末の子
無垢な間を抜け出し子らは早春の冷たい風に顔をさらしぬ
薄雲はすぎざり螺旋階段の葉をのぼりゆく春の陽さしが
星形の葉がむくむくと地に湧きて万華鏡のごとき春くる